



学校だより

横浜市立相武山小学校

3月号

令和5年2月28日

～ まちのみんな ひとつになあれ ～



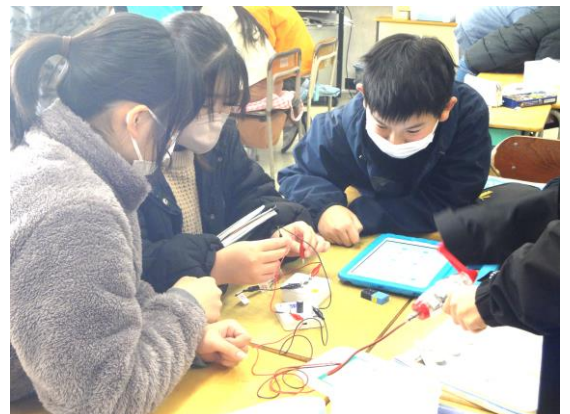
「パスタ」

学校長 後藤 直樹

長く続いているコロナ禍もそろそろ収束を願いながら、令和4年度が間もなく終わろうとしています。私は毎日、各教室をまわることを日課としていますが、マスクをしながらでも子どもたちが生き生きと活動している姿を見ると少しホッとさせられるものがあります。

さて、私はコロナ禍をきっかけに時々キッチンに立つようになりました。とは言っても私のレパートリーは3つくらいなのですが、その中の一つにパスタ料理「カルボナーラ」があります。イタリア版の「卵かけごはん」みたいなものと聞き、軽い気持ちで挑戦してみました。他の卵料理と同様、奥が深く簡単ではありませんでした。火を入れすぎてはパサパサの卵とじのようになり、冷ましすぎるとあのとろみがつかず、レストランのそれとはほど遠いものが出来上がりました。初めからスマホでレシピを検索すれば失敗も無かったかと思いますが、なぜか自力での解決が楽しく感じられ、意地にもなっていました。失敗を繰り返す中で、徐々に段取りが確立していきました。試行錯誤の中から見つけたポイントは、茹で上がったパスタをいかに素早く具と合わせ、溶き卵と生クリームを加えるかということでした。ところで、みなさんにお伝えしたいのはレシピの話ではありません。これは料理の場面でしたが、論理的な思考で段取り（手順）を考えるという過程こそ「プログラミング的思考」なのです。カルボナーラで言うと、先にベーコン・玉ねぎに火を通して弱火で保温しておけば、8分後の茹で上がりのタイミングに合わせ、熱い状態の具材と混ぜることができるだろう。卵や生クリームは早めに冷蔵庫から出しておけば、混ぜたとき温度が下がりにすぎないだろう。卵がほどよく固まるという結果を予想しながら、これらの手順を考えるという思考パターンの中に、これからの時代に必要とされている「プログラミング教育」のヒントがあります。ですから教室で、ロボットを入力した指示通りに動かす方法を学ぶわけではありません。

学校生活の中には、理科の実験や観察の手順を自分で考える場面や、家庭科の調理実習や裁縫実習の中にも論理的な思考力を必要とする場面は点在しています。また、学級でお楽しみ会の企画をしようという場面では、「皆が楽しめるためにはこういう配慮が必要で、それには事前にこんな準備をすればよいだろう」「仲間と協力して進めるには、役割分担や時間設定も必要だろう」などの段取りを考える力が養われます。PC等を活用したプログラミング学習と共に、このように主体的に考える経験を積み重ねるような活動を今後も大切にしていきたいと考えています。



6年生 理科 プログラミングの授業